

本連載における「翻訳」について ⑤

前回まで、ハーバーマスの唱える「共同翻訳」における、宗教的市民と世俗的市民のそれぞれが抱える「非対称性」について確認してきた。宗教的市民については、「翻訳付帯条件」が宗教的市民にのみ適用される点、そして宗教的言語のみが特殊な位置づけをされる点の二つがあり、また世俗的市民については、公共圏において宗教的真理を否定する意見を出せなくなるという点を挙げた。この非対称性については、今後の議論を深める中で引き続き論じていくが、今回はその議論につながる論点として、ハーバーマスの提起する「翻訳」がそもそもどういった性質を持つものであるかに注目したい。

「源意味的な翻訳 (anasemic translation)」

ハーバーマスは果たしていかなる意味で翻訳という言葉を使っているのか。政治学者のアーフィ・バドゥレディンは、ハーバーマスの翻訳論では、民主主義における宗教的市民の役割を救い出すために翻訳が必要になることについては論じられているものの、翻訳作業そのものの内実が等閑視されている点を指摘している (Badredine 2015: 493)。そして、ハーバーマスが宗教的貢献の真理内容を誰にでもわかる言葉に置き換える必要性を論じていることに触れる中で、そこで求められる翻訳は単なる言葉や意味の置き換えではなく、ある特定のプロセスを経た翻訳であることを指摘している。

バドゥレディンによれば、そのプロセスには二つの工程があるという。それは、宗教言語から宗教的な意味を脱落させる (de-signify) 工程、そしてその宗教的な意味を脱落させた言葉に意味を付け直す (re-signify) 工程である。より具体的に言えば、宗教的真理に関わる内容から元々の意味をこすり落とし、それを宗教的な言説を源泉としないポスト形而上学的な意味に置き換えるというプロセスになる (Badredine 2015: 495)。これを、バドゥレディンは精神分析学者のニコラス・アブラハムの造語である“anasemic”という単語を用いて、“anasemic translation” (筆者訳:「源意味的な翻訳」) と名付けている (Badredine 2015: 495)。

この翻訳のプロセスにおいて押さえておかなければならないのは、宗教言語から宗教的な意味を脱落させた後に残る何かの存在が、実際にあるかは別として想定されているということである。バドゥレディンは、それを「核 (kernel)」や「隠された核心部 (hidden core)」などと表現しているが、それは、「意味不在 (a-semantic, non-meaning)」なものであり、見える形で提示できるものではないが、それが意味の源泉となるという理解である (Badredine 2015: 497-498)。このやや直感的に捉えづらい翻訳のあり方について、バドゥレディンは以下のように述べている。

したがって、宗教的な貢献の真理内容を中立的 (世俗的) な理性に翻訳するよう宗教的市民に呼びかける時、ハーバーマスが追い求めているものは源意味的な翻訳であると私は提唱している。つまりハーバーマスは、宗教的な貢献の中に核となるもの、すなわちメタ宗教的なものがあると

仮定しており、それを取り戻したり発見することのできるものとして、また中立的・世俗的な言説として取り入れたら表現することのできるものとして捉えているように見えるのである。ハーバーマスは、宗教的な言説の前提条件、つまり宗教的言説を可能にしているものを、中立的な言説に翻訳するよう宗教的市民に求めているように思える。しかし、メタ宗教的なものは前宗教的もしくは無宗教的なもの (pre- or a-religious) であるため、宗教的な言説の中では提示できないものである。つまりハーバーマスは、(意味論の宗教的な領域に関する限りにおいて) 意味付けができないもの (the unsignifiable) を意味の体系に取り込むよう求めているのである。ハーバーマスは事実上、宗教的意味の核、すなわち彼が「真理内容」と呼ぶものに到達するために、宗教的意味の脱意味化 (designification) の操作という解体 (dissection) を求めているのである。

(Badredine 2015: 498、筆者訳)

バドゥレディンは、この理解では宗教的な言説は「殻 (shell)」のようなものであり、宗教的市民はその殻の中にある「核」を覗き込んで、そしてその核を誰にでもわかる言葉に移行させるのだと説明している。その一方で彼は、哲学者のデリダの言葉を借りながら、この一連の工程を経る中で宗教的な言説の意味が変質してしまうことに触れ、「ハーバーマスの宗教的な言説の源意味的な翻訳が上手くいったとすると、その結果として生まれるものは宗教的言説の真理内容から変質したものであり、それは宗教的な言説や意味とは異質なものである」とも論じている (Badredine 2015: 498)。

そしてこのプロセスで生まれるものは「一つの新しい『言語』」 (Badredine 2015: 498) であるとし、以下のようにまとめている。

このように、源意味的な翻訳を通して宗教的言説から生まれたものを、宗教的言説の中で展開される意味と混同してはならない。つまり、アブラハムの用語を用いるならば、ハーバーマスが宗教的貢献の真理内容に由来するものとして説明しているシンボルを、彼が誰にでもわかる言葉で説明するものと混同してはならないのである。(中略) 言葉は同じかもしれないが、その意味は宗教的なものではなく、宗教的な意味に関連しているものとすることはできないのである。ハーバーマスが、共同翻訳が必要とされる領域における宗教的言説の中立化について語るとき、それは宗教的な意味体系とは (事実上) つながりのない意味体系を構築する根本的な操作であるということを実際には意味しており、それはたとえ自然言語と同じ「言葉」が使われていたとしてもそうなのである。 (Badredine 2015: 499、筆者訳)

[引用文献]

Badredine, Arfi. 2015. “Habermas and the Aporia of Translating Religion in Democracy.” *European Journal of Social Theory* 18, no. 4: 489-506.